【史料紹介】

『点石斎画報』に見える科挙関連記事

――その三「科挙の不正――替え玉受験」

湯城吉信

科挙には、不正がつきものである。小さな字で経書の字句を全面に書き付けたカンニング用下着は有名である（藤井斉成会有隣館所蔵。画像は宮崎市定『科挙――中国の試験地獄』の口絵に見える）。個別のブースで長時間にわたって試験を受ける科挙ではこのようなカンニングの方法もあったのかもしれない。

ただ、科挙には、カンニング以外にさまざまな不正の方法があった。そのうち、今回は、まず科挙の不正が横行する状況を皮肉る記事一則を挙げた上で、替え玉受験（「代筆」「槍替」）に関する記事三則を紹介したい。次号では、本籍詐称およびカンニングに関する記事を紹介したいと考えている。

なお、前回同様、題名の後のカッコ内の年月日は、各記事の発行年月日である（『点石斎画報通検』（香港・商務印書館、二〇〇七年）による）。文章の後にある「　」は閑章（印章の形による一言コメント）である。原文の句読点は、『点石斎画報全文校点』（香港・商務印書館、二〇一四年）を参考に適宜改めた。

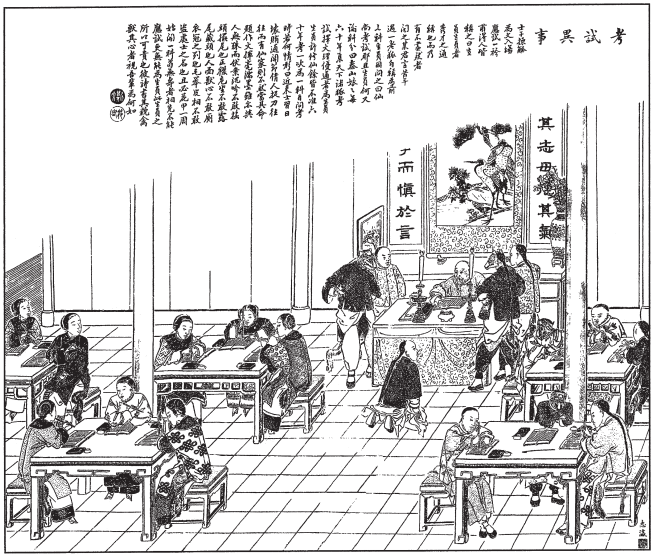
①**「考試異事」**（科挙異聞）（礼集、大可堂版一一-九八、一八九四・五・一）

＊狐に託して科挙の堕落を皮肉る。本稿では、科挙の不正が横行する状況を象徴するものとしてまず紹介する。

＊画は塾の様子だが、生徒の中の何人かは獣の顔をして

いる。また、人間の顔をしている生徒もよく見るとその多くに尻尾が描かれている。教師の後ろにある対聯には「…其志毋□其氣」「…而慎於言」という語が見える。それぞれ、『孟子』公孫丑上篇「持其志毋暴其気」（其の志を持して其の気を暴う毋かれ）と『論語』学而篇「敏於事而慎於言（事に敏にして言に慎む）」の文句を取っている。

【原文】士子操觚爲文、入場應試、一衿甫得、人皆稱之曰生員。生員者、秀才之通稱也。而乃有不盡然者。聞之某君言、昔年遇一老狐、自稱爲前人科生員、因問之曰、「仙尚考試耶。且生員何又論科分。」曰、「泰山娘娘每六十年集天下諸狐考試、擇文理優通者爲生員。生員許修仙、餘皆不准。六十年考一次爲一科耳。」問考時若何情形。曰、「近来士習日壞、賄通關節、倩人捉刀、往往而有。仙家則不然。當其命題作文、揮毫濡墨、雖亦與人無殊、而伏案沈吟、不敢搖頭擺尾也。正襟危坐、不敢露尾藏頭也。人面獸心、不敢厠衣冠之列也。毛舉皮相、不敢盜處士之名也。且必花甲一周始開一科、苟無壽相者、先不能應試、更無能爲生員。此生員之所以可貴也。彼詩書其貌、禽獸其心者、視吾輩爲何如。」



閑章「斯文」「將喪」

【大意】読書人は筆を執り文章を書くものであり、科挙

を受け、初めて資格を得た者を、「生員」と称した。生員とは、秀才（科挙の合格者）の通称である。だが、そうではない者もいる。ある人から聞いたところ、昔、一匹の老いた狐に遇った。自称、前の人科？の生員だと言う。そこで、「仙界でも試験があるのですか。それに生員の科目はどのようになっていますか」と聞くと、以下のように言った。「泰山娘娘は六十年ごとに天下の諸々の狐を集めて試験し、文章が優れている者を選んで生員とします。生員は仙人となる修行が許されますが、その他の者は許されません。六十年に一回、一科目だけ試験します。」試験の時の状況を聞くと、以下のように言った。「最近、〔人間界では〕読書人の質が低下し、買収し渡りをつけたり、代筆を雇ったりすることが、横行しています。〔ですが〕仙界ではそんなことはありません。与えられた問題に対して筆墨を執って作文するのは、人と同じです。ただ、机に伏せて呻吟し（まじめに解答し）、あえて「揺頭擺尾」する（頭を振り尾を振る＝媚び諂う）ことはありません。また、「正襟危坐」（襟を正して正座）し、あえて「露尾蔵頭」する（尾は出すが頭は隠す＝ごまかそうとする）こともありません。「人面獣心」（ひとでなし）の輩は、あえて役人の列に加わることはありません。「毛挙皮相」の（せこく皮相だけ取り上げる、上っ面だけの）輩は、あえて処士（仕官していない読書人、郷紳）の名を盗むことはありません。それに、必ず六十年に一度だけしか行われないので、長寿の相がない（短命の）者は、そもそも試験を受けることができませんし、まして生員となることはできません。以上が生員が貴重である理由です。かの詩書を容貌としながら、その心は禽獣である者たちは、我々のことをどのように見るでしょうか。」

「斯文まさに喪われんとす」

【注】○泰山娘娘　道教の神。別名天母娘娘。泰山の神の娘と言われ、女性の守り神とされる。碧霞元君宮などで祀られている。○關節　渡りをつけること。○倩　代わる。○処士　仕官しない読書人。郷紳。○花甲　甲子。六十年を周期とする干支のこと。

【解説】ここでは、四字熟語を多用しながら、当時の科挙の不正横行を皮肉っている。「揺頭擺尾」「露尾蔵頭」などは、いずれも動物の体の部分が入った言葉なので、

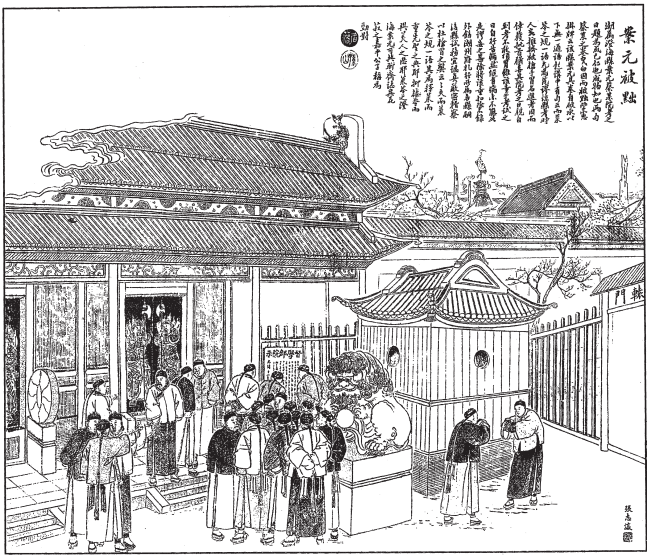
狐に用いてしゃれとしている。狐に「人面獣心」という言葉を使わせるのはかなりブラックなジョークであろう。日本同様、中国でも狐は人を騙すずるいものというイメージだが、その狐でさえ人間よりもまじめだというのは痛烈な人間批判であろう。

②**「案元被黜」**（トップ合格者、失格に）（土集、大可堂版一〇-四〇、一八九三・三・一四）

＊潮州で替え玉受験が見つかったこと。

＊門の右下の柵のところに「督學部院示」という掲示板の文字が見える。

【原文】潮屬澄海縣案元蔡某、院考之日、題爲「成己、仁也。成物、知也」兩句。蔡某之卷曳白、因而被黜。學憲掛牌云、「該縣案元、其卷自破・承以下、無一通語。起講中有句云『而菜苓之規』一語、尤爲荒謬。諒縣考時、人數擁擠、被槍手冒名進考、因而倖獲批首猶喜。其院考之日、親自到考、不敢頂冒。雖該童于考試之日自行告病、然縱有病亦不應如是謬妄之甚。除將該童扣除不錄外、飭潮州府扎行所屬各縣、嗣後縣試務宜認真嚴密稽察以杜搶冒之弊」云云。夫「而菜苓之規」一語、其爲釋菜而重先聖之典耶。抑榛苓而興美人之思耶。菜苓之澄海案元、可與『聊



齋誌異』花菽之嘉平公子稱爲勁對。　閑章「名落」「孫山」

【大意】潮州の澄海県の一位合格者の蔡某は、院考（童試の最終試験）の日、〔四書の一つである『中庸』の〕「成己、仁也。成物、知也（己を成すは仁なり。物を成すは知なり）」両句が問題になっていた。蔡某の解答用紙は白紙で、不合格となった。学憲（教育行政の長官）は掲示して以下のように言った。「当該県の一位合格者の解答用紙は、破題・承題以下、一語も意味をなしていない。起講（議論の開始部分）中の『而菜苓之規』という語は特にひどい。思うに、県試の時、受験生が多く、替え玉（代筆）に代理受験してもらったおかげで、幸い一位合格することができた。〔だが〕院試の日は、自分で受験し、替え玉を使えなかった。この受験生は、受験日に自ら病気を報告していたが、たとえ病気でもこのようにひどいことはあり得ない。この受験生を不合格とする以外、潮州府…所管…の各県に通達し、爾後、県試の業務は厳格に検査を行い、替え玉受験が発生しないようにするよう通達する」云々。「而菜苓之規」という語は、釈菜（入学時に先聖を祭る儀式）のことで、先聖を重んじる儀式を言うのか。それとも榛苓のことで、美人（賢人の喩え）を思う興（託して思いを述べる叙述法）だとするのか。菜苓の澄海の一位合格者は、『聊斎志異』の花菽の〔「花椒」を「花菽」と書き間違えた〕嘉平公子と双璧をなすと言えよう。　「名　孫山に落つ（合格掲示板から漏れる）」

【注】○案元　科挙の秀才試験の最優秀合格者。○院考　院試、道試とも言う。各省での試験。童試の最終試験。○成己、仁也。成物、知也　『中庸』第二十五章。○曳白　白紙解答のこと。○学憲　提督学政。各省の教育行政の長官。○起講　八股文の第三段、議論を始める部分。○県試　童試の最初、府試・院試の前段階の試験。○槍手　替え玉。文字通りには槍を使う兵士。○批首　院試の一位合格者。○頂冒　「頂名冒姓」の略。人の名前をかたること。○榛苓　榛木（はしばみ）と苓草（かんぞう）。『詩経』邶風・簡兮に、山有榛、隰有苓、云誰之思、西方美人。」（山に榛有り、隰（さわ）に苓有り、云（ここ）に誰をか之思う、西方の美人なり）とある。教訓的解釈を好む儒教の伝統的解釈では、「美人」は賢人を指すとする。○釋菜　「釋采」とも書く。古代、入学の時、昔の聖人や師を祭

る儀式。○興　『詩経』の六義の一つ。自然の風物に託して自分の感興を歌う詩の叙述法。○『聊斎志異』　清の蒲松齢が書いた怪異小説集。その中に「嘉平公子」という話がある。ある書生が幽霊の女性と結ばれるが、その女性は書生が無学であることを理由に去ってしまう。○勁對　對勁か？（ただし、『申報』も同じ。）○名落孫山　名前が合格掲示板の末尾の孫山の後ろにある。試験で不合格になることを指す。宋・範公偁『過庭録』「吳人孫山、滑稽才子也。赴舉他郡、鄉人託以子偕往。鄉人子失意、山綴榜末、先歸。鄉人問其子得失、山曰、『解名盡處是孫山、賢郎更在孫山外。』」（孫山が受験者の結果を聞かれ、「〔合格者の最後尾であった〕自分より後ろであった」と答えた故事に基づく。）

【参考】『申報』一八九三・一・三〇（十二月十三日）（七一〇六号、二面）…題名を含め同じ記事がある（違いは「嗣後」が「自後」になっているだけ）。

【解説1】替え玉受験は頻繁に行われたらしく、『点石斎画報』には多くの関連記事がある（「求栄反辱」（一－二一四、一八八五・一・一）、「厳懲槍替」（三－二一七二、一八八七・二・八）、「一炷香」（七－二九二、一八九一・一・一五））。特に、広東省では盛んだったらしい（「厳懲槍替」によれば、誰が受かるかで博打も行われていたらしい）。また、それが通るのは試験官が賄賂を受けて加担していたからとも言われる（「一炷香」）。「槍手」「捉刀生」（曹操が影武者の横で刀を持って立ったことに基づく。劉義慶『世説新語』容止）など替え玉を表す隠語はいろいろあっただろうが、一炷香（いちしゅこう）もその一つ。文字通りの意味は、一本の香（が燃える時間）。科挙の時間が長いからであろうか。もしくは、まっすぐにきちんと書かれた文字（きちんと書かれた解答）を隠喩するものであろうか。

【解説2】この記事を読んで、その意味がすぐにわかる人は少ないであろう。それは、この文章は経学（科挙のテキストになった儒教経典に関する学問）の教養がないと読めないからである。このような文章を書く筆者自身そのような教養を身に着けた知識人であり、読者の多くも知識人層であったことが窺える。

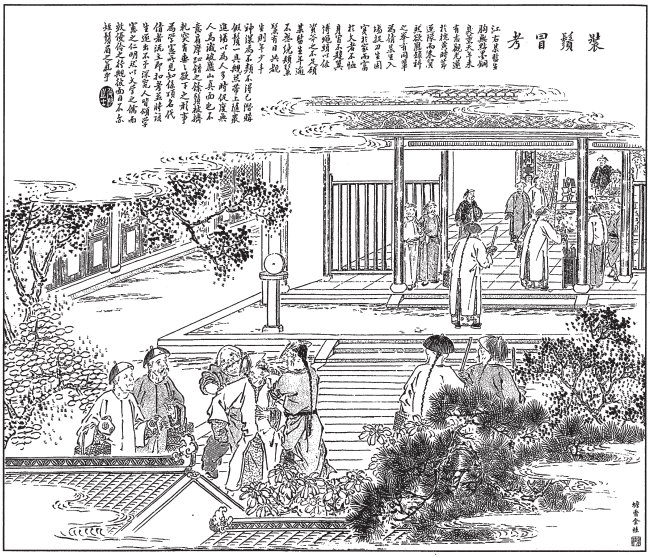
③「**装鬚冒考**」（付け髭の替え玉）（木集、大可堂版一〇－二五四、一八九三・一一・四）

＊付け髭で年齢をごまかそうとしたが、落としそうになってばれた話。

【原文】江右某監生胸無點墨、銅臭薫天、年來有志觀光、遂於槐黄時節、逐隊而來、貿然欲應録科之擧。有同輩爲倩某生入場。捉刀生、固寒於家而富於文者、不恤身冒不韙、冀博蠅頭以佐資斧之不足。顧某監生年逾不惑、繞頰鬚鬚有目共覩。生則年少丰神、深爲不類、不得已潛購假鬚一具魏然帶上、隨衆進場。以爲人多時促度無人馬識破廬山真面也。不意、肩摩趾錯之餘、鬚被擠軋、突有垂垂欲下之形。事爲學憲所見、知係頂名代倩者流、立即扣考並將該生逐出、不予深究。人皆頌學憲之仁明、然以文學之儒而效優伶之行、魏彼面目、不亦短鬚眉之氣乎。

閑章「皮相之士」

【大意】江右の某監生は、学問のかけらもなく、金銭にしか関心がなかったが、長年、国の栄光を拝見したい（皇帝に仕えたい、仕官したい）と思っていたが、ついにえんじゅの花咲く季節に、人の群れに随って上京し、軽率にも録科（補欠試験）を受けようと思い立った。同輩の者が某に代わって試験会場に入った。代筆者は貧乏だが



文才はあり、悪事を冒して、わずかな利益を求めて旅費の不足を補おうとした。ただ、某監生は四十を過ぎており、頬の周りにはっきりと鬚が見えた。代筆者は若い容貌で、全く似ていなかったので、やむを得ずこっそり付け髭を買って恥ずかし気につけて、大勢に紛れて試験会場に入った。人が多い時に素早く入れば、見破られないと思ったのである。あに図らんや、人混みの中で、付け髭が押されて、突然はずれそうになった。事は学憲（長官）の知るところとなり、替え玉受験の輩だとわかったので、ただちに試験資格を抹消し、当該監生を駆逐したが、深くは追及しなかった。人はみな学憲の仁徳を称えたが、文事に携わる儒生でありながら、俳優の行いを真似て、恥ずかしい格好をさせるのは、また男を下げる行いではないか。「皮相の士（上っ面の輩）」

【校勘】○顧　原文のまま。顧の俗字（現代の簡体字はこれ）。

【注】○江右　江西。長江中下流の南岸の地域。○監生　国子監（最高学府）の卒業生。国子監については、孔喆『図説　国子監―中国歴代王朝における最高学府』（科学出版社東京、二〇一九年）が詳しい。○銅臭　銅銭の臭い。もと金銭で官位を買う人など金の亡者を風刺する。後に利益第一の人を風刺するのに使った。○観光　『易経』観卦の六四の爻辞「観国之光、利用賓于王」（王者の徳を見る。王に仕えるのによろし）に基づく。○槐黄　夏にえんじゅの花が咲く季節。科挙を受験しに行く季節であった。○録科　郷試の資格が得られなかった人々の一部（補欠合格者、監生など）は学政の試験を受け、郷試合格に挑戦することができた。これを録科と言う。言わば、補欠試験である。○倩　代わる。「倩槍」＝替え玉。○捉刀生　代理・代筆する人の俗称。「捉刀人」「槍手」「替槍」とも言う。ゴーストライター。○不韙　悪事。○蠅頭　わずかな利益。○資斧　資財と道具。旅費を指す。○靦然　恥ずかしそうな様子。○鬚眉　髭と眉。男子の代名詞。○短気　気を落とす。

【解説】この記事を読んで湧く疑問は、生活に困っている若者の代筆者は、自分で受けて合格すればよいのではないかということである。そこまでは書かれていないのでわからない。（旅費の不足を補うために引き受けたと

あるので、何らかの理由で試験会場の町に来ていたことになる。二重受験はないと思うが。…もしや他のレベルの試験？）経済的理由などにより科挙を受けることができなかったのか、実はそれほどの学力でもなかった（実際に受かる実力もなかった）のか、追究できればおもしろいテーマであろう。

④**「請飲便酒」**（便酒をお召し上がれ）（射集、大可堂版一一一二五五、一八九四・一〇・二四）

＊題名の「便酒」は「安い」と「小便の」をかけるのであろう。

【原文】大比之年、毎有一種棍徒自稱藩署吏房、代人雇槍買荐、經手分肥、四出冒騙。無識者信之、輒受其愚、無所控告。本屆某省有甲・乙二人、衣極都麗、見某生於茶肆、相與接談、如舊相識。次日、至生寓、私以傳通關節等語、説得天花亂墜、謂祇費五百金、便可香分蟾窟矣。生惑之、以其語商諸師。師曰、「此騙局也。如不信、可就計擒之。」遂約密友及健僕數人、藏諸室、潛約甲於夜分過付。屆時、二人果至、以手拍生肩曰、「恭喜恭喜、當飲君喜酒矣。」生友聞之、即率健僕躍然而出、謂、「今宵先有便酒、可試嘗之。」二人知事不妙、飛步欲逃、已

被群僕擒住。搜其衣、得偽據累累。詢其姓名、堅不吐實。友曰、「拿喜酒來。」僕攜溺壺進、笑謂甲曰、「不腆醇醪、請爲君壽。」僕握髮箝口灌之、鼻皆出血。乙知不免、張口就飲。生笑曰、「先生量大、請再斟一壺」、乃吐實。至黎明、始釋之去。此可爲無識之士、功名心熟者、作當頭棒喝。故錄之。　　閑章「臭味」「差池」

【大意】郷試の年には、ある種のごろつきが現れ、藩署吏房（役人？）と称し、代わりに替え玉（代筆）を雇ったり推薦を手配してやると言い、利益を山分けし、あちこちで騙しを行った。見識のない者はそれを信じ、愚弄されていたが、訴えることもできなかった。今期、某省に甲、乙二人がおり、美しく着飾り、某生と茶店で会い、旧知のように打ち解けて語り合った。次の日、生の寓居に至り、ひそかに渡りをつけることができるなどともっともらしいことを言い、五百金だけ払えば、科挙に合格できるぞ（進士になれるぞ）などと言った。生は悩んで、師に相談した。師は「これはペテンだ。もし信じないのなら、計略を巡らせて捕まえることができるぞ（捕まえ方を教えてやるぞ）」と言った。ついに、親友とたくましい下僕数人と相談し、彼らを部屋に隠し、こっそり甲に夜分に来るように言った。その時になり、二人はやって来て、生の肩をたたいて「おめでとうございます。お祝いの酒宴ですね」と言った。生の友は聞いて、下僕を率いて躍り出てきて、「今晩はまず安い酒（便は「安い」と「小便」をかける？）がありますからお賞味ください」と言った。二人は雲行きが怪しいと見て、飛んで逃げようとしたが、下僕たちに取り押さえられた。その着物を調べると、偽の証書がいっぱい見つかった。名前を聞いたが、決して口を割らなかった。友は、「祝い酒を持って来い」と言うと、下僕は尿瓶を持ってきて、甲に笑って「まずいどぶろくですが、長寿をお祈りして」と言った。下僕は、髪をつかんで、口を押えて酒を注ぎ、鼻からは血が出た。乙は逃げられないとわかり、口を開けて飲んだ。生は笑って甲に、「いける口ですね。もう一壺お召し上がれ」と言うと、ようやく口を割った。明け方になってようやく解放した。以上は、無知な士で功名心が盛んな人の諌めとなればと記した。　　「臭くて仕方ない」

【注】○大比　周代に三年毎に行われた官吏評価および

選抜。隋唐以降は科挙を指し、明清では特に郷試を指す。○分肥　利益を山分けする。○蟾窟　蟾宮とも。月にはヒキガエルが住むと考えられたことから月の異名。引いて科挙に合格した華々しい世界を言う。「蟾宮折桂」は科挙で進士に合格すること。清・陳維崧「百字令」詞「淮王城下、有扶疎叢桂、香分蟾窟。」○溺壺　尿瓶。「溺」は発音・意味ともに「尿」に同じ。○不腆　粗末な。○當頭棒喝　禅宗で弟子に警策で打ち一喝を食らわすこと。引いて、注意喚起すること。○差池　ひどい。

【解説】これは、直接、替え玉について述べる記事ではなく、替え玉を紹介するブローカーを巡る事件なので、後に（おそらく次々回）紹介する「事件（騒動）」の回で紹介してもよいのかもしれない。ただ、このようなブローカーが存在したこと自体、替え玉が行われていた傍証ともなるであろう。ただ、この報復の仕方はいささかやりすぎではないか。現代では明らかに犯罪であるが、当時は私刑がふつうに行われそういう扱いにはならなかったことが覗える（ブローカーにとってももしこれで解放されれば（逮捕されなければ）それに越したことはなかったであろう）。また、読者もこれを見て溜飲を下げることができたのであろう。

参考文献　＊今回特に参照したもの。登場順。

葉漢明、蔣英豪、黄永松編『点石斎画報全文校点』（香港・商務印書館、二〇一四年）
葉漢明、蔣英豪、黄永松編『点石斎画報通検』（香港・商務印書館、二〇〇七年）
翟国璋主編『中国科挙辞典』（江西教育出版社、二〇〇六年）
熊慶年『中国古代科挙百態』（〈中国古代社会百態〉第一輯、東方出版中心、一九九七年）
＊科挙の不正行為を紹介する「五、層出不窮的作弊花様」の冒頭に替え玉受験が紹介されている（1．名流竟然当槍替）。
李世愉『中国歴代科挙生活掠影』（瀋陽出版社、二〇〇五年）
＊二四七頁「花様翻新的舞弊手段」

『欽定大清会典事例』巻三四〇

「礼部・貢挙・申厳禁令」